

# モードは語る

中野 香織

## 琉球織物にみる困難と希望

伝統工芸を次世代につなぐため、多くの人が知恵と力を尽くしている。那覇市にある首里染織館suikaraも情熱にあふれた場所だ。首里織や紅型（びんがた・琉球の染め物）、宮古上布といった伝統的織物・染め物の展示施設にして工房であり、交流スペースやショップも備える。

この場所で伝統の継承という点で印象に残る逸話を聞いた。琉球には海外との交易を映し出す多種多様な織物があるのだが、それが現代に継承されている背景には「税」があったというのだ。

沖縄の島の一部は石灰岩質で稲作に向かない。その場合、琉球王府は年貢とし



首里染織館suikaraは琉球王国の伝統的織物・染め物の展示施設のほか工房も兼ねている

て米の代わりに布を納めさせていた。貢納布（こうのうふ）という。布のデザインは王府が指定した装飾性の高いものだが、織るのが難しい上に厳密な検査まである。困難な機織りを担ったのは女性だった。自分は決して着ることがない高級な布を織らされ、税として納めていた。

つらい歴史である。しかし、過酷な試練があったからこそ、琉球王国がなくなったあと、技術を生かした織物が商品として売れるようになった。厳しい税制が結果として高度な工芸を育成し、後代まで継承される技術を育てていたとは、なんと皮肉なことなのか。

### 伝統工芸の持続性どう

現代では、国の支援に加え、民間の奮闘もあって、現代の嗜好に合う美しい布が高級品として高値で取引されている。

しかし、問題も多い。宮古上布には手積みの糸が必要だが、肝心の糸をつむぐ人が高齢化しているのだ。若者が志願しても、支払われる賃金はコンビニでのバイトよりも安いので続かない。この末端から、100万円超で取引される最終製品までの流通の壁が不透明に厚いことは、伝統工芸だけの問題ではないだろう。

素材の生産者への公平な配分や旧態依然とした流通プロセスの改革。この課題を現実的に幸福に解決することが伝統産業を持続可能にする。困難な状況を乗り越える尽力はきっと次の時代に形を変えて生かされる。琉球の織物の歴史はそんな希望のメッセージを伝えてくれる。